ヤマトタケルと伊吹山

随　筆

權　田　俊　一*

Yamato Takeru and Ibukiyama Mountain

Key Words：Yamato Takeru, Battle of Ibukiyama, Takeru's Enemy

ヤマトタケルとは

ヤマトタケルは、古事記[1)]、日本書紀[2)]（記紀）に登場する四世紀、ヤマト朝廷初期の頃の英雄である。第12代景行天王の皇子で双子の弟として生まれた。名は小碓命（おうすのみこと）、または倭男具那命（やまとおぐなのみこと）という。

彼は天皇に命ぜられて、当時ヤマト朝廷に服従していなかった九州の熊襲兄弟を討ちに行き、兄をやっつけ、弟のタケルを討つときに、タケルに「吾二人に益（まさ）りて建き男は座しけり。ここをもちて吾御名を献らむ。今より後は、倭建御子（やまとたけるのみこ）と称ふべし」（古事記）といわれ、それからヤマトタケル（日本武尊）と名乗るようになった。これがヤマトタケルの西征である。

ヤマトタケルが西から帰るとすぐに東の国の平定を命じられた。東国に向かう途中、伊勢に立ち寄り、叔母のヤマト姫に、「天皇既に吾死ねと思はす所以か。何しかも・・・・・軍衆を賜わずて、今更に東の方十二道の悪しき人等を平（ことむ）けに遣はすらむ。・・・」（古事記）と泣き言をいう。そして東征を行い、伊吹山まで帰ってきて、そこで傷を負うのである。

西征では荒々しい人格、東征では柔らかい人格を感じる。これらのことから、記紀に登場するヤマトタケル全部は同一人とは思えない。そこでいろいろな伝承に現れる人物を一人の人物にしたのがヤマトタケルであろう、と考えられている。また実在の人物ではなかったと考える人もいる。

これらのことを飲み込んだ上で、ここではヤマトタケルの足跡をたどっていこう。というのは、ここで取り上げたいのは、ヤマトタケルの人物像ではなく、英雄といわれたヤマトタケルに立ち向かったのはどんな人達だったか、なのである。私がヤマトタケルに敵対する人物に興味をもったのは、箱根の足柄峠（足柄坂）を歩いていた時のことである。

足柄明神神社跡に近いところに説明文がある。それには「ヤマトタケルが東国征伐に向かったとき、足柄明神は白鹿の姿で現れ、ヤマトタケルによって蛭（ひる）で打ち殺されたことで東国が平定された。」とある。これは歴史的記述によくある勝者の表現である。そこから少し離れたところに別の説明文がある。「足柄明神は東国平定の帰りに食事をしているヤマトタケルを白い鹿になって襲って打ち殺された坂の神です。坂東人（ばんどうびと、関東地方の人）の誇りを守った古代の英雄なのです。・・」前の文章とは立場はまったく逆である。

どんな戦いでも必ず相手がいる。それはどんな人達だったのだろうか。まずはヤマトタケルの東征のあらましを見ておこう。

ヤマトタケルの東征

東征の経路は、古事記と日本書紀でかなり異なる。図－1は上田正昭「日本武尊」[3)]の東征経路図の一部である。古事記では上総（千葉県）まで行って引き返しているが、日本書紀では東北の竹水門（たかのみなと、現在の宮城県七ヶ浜町あたりか）である。ここでは、この経路のうち、野火の難にあった焼津、海が荒れて弟橘比売が入水した走水（浦賀水道）、戦闘を繰り広げた上総の鹿野山、亡くなる原因とな

* Shunichi GONDA
1936年9月生
早稲田大学　第一理工学部　電気工学科
修士修了（1962年）
現在、大阪大学名誉教授
工学博士　半導体物理・工学
TEL：0797-89-3892
FAX：0797-89-3892
E-mail：s-gonda@msj.biglobe.ne.jp

図－1　ヤマトタケルの東征経路
実線：古事記　点線：日本書紀
原図は上田正昭「日本武尊」

る傷を負った伊吹山をとりあげよう。ただし、鹿野山は記紀には記述がなく、伝承[4) 5)]によるものである。また同じ事件でも、古事記と日本書紀では取り上げ方が違うところが多い。ここでは古事記の内容を主としてとりあげよう。

焼津の野火の難

ヤマトタケルが尾張を出て、相模国（実際は駿河）に着いた時のこと、その国造は、「この野の中に大沼があり、その沼の神はひどく乱暴な神です」と云ったので、タケルは野の中を進んでいった。すると国造は野に火を放った。欺かれたと知ったタケルは叔母ヤマト姫にもらった袋を開けると火打石が出てきた。まず刀で草を切り払い、その火打石で火をつけ、国造らを切り滅ぼし、火をつけて焼いた。そこでここを焼津という。というのが古事記の記述である。

ではこの国造あるいはヤマトタケルに敵対したのはどういう者だったのだろう。焼津図書館に行って調べてみると、「ふるさと三国志」[6)]という本のなかに、日本武尊は誰と戦ったか、という項目があった。そこでは阿部高丸という人物に注目している。「陸奥の高丸、駿河国清見ヶ関まで攻上る」（津軽旧事記）と「東夷阿部高丸暴悪の時、将軍坂上田村麻呂、延暦20年・・追討の為に山道を経て奥州へ下向・・」（諏訪明神絵詞）という記述から推測して、陸奥の阿部高丸が駿河へまで勢力を伸ばし、ヤマト朝廷を脅かしていたのではないかというのである。そして「駿河風土記」には「一書に曰く、日本武尊、東夷を越えて駿河国浮嶋原に至る。阿部市と東夷、尊を欺きて狩猟に託す」とあり、阿部一族が敵対者だったという。

また縄文遺跡の分布から古代の東北と静岡とは生活の仕方につながりがあることがわかっていた。これにたいし、弥生文化の遺跡は関西以西に多く、青銅器、鉄器などの出土も多い。ヤマトタケルは、自然との調和に生きる縄文文化の人たちと敵対し、これには勝ったということなのだろう。

この出来事があった場所はわからない。これに思いを至らせることのできる場所は焼津神社である。

写真－1　焼津神社　右の石像はヤマトタケル

走水の受難

ヤマトタケルは東征を続け、走水（はしりみず）の海にやってきた。ここは現在の浦賀水道である。対岸の上総に船で渡ろうとした。この時、海の神が波を荒立てた。このため船は前に進むことができない。そこで、妃の弟橘比売は「妾（あれ）、御子に易（かわ）りて海の中に入らむ。御子は遣はされし政を遂げて覆奏したまうべし。」と云って畳を敷いて海の中に入った。そのため波は静まり、タケルの船は前に進むことができた。

妃を失うという大きな犠牲を出し、ヤマトタケルもこのことを嘆いて、このあと、あちこちで「吾妻はや」という言葉を発している。この場合の敵対者は自然の猛威であった。日本書紀には、タケルは「是小さき海のみ、立跳（たちおどり）にも渡りつべし。」と高言したとある。タケルの自然を見下した心のおごりも、敵対者だったといえよう。

写真－2　走水神社から対岸の上総（千葉県）を望む

鹿野山の戦い

鹿野山（かのうざん）の戦いは記紀には載っていない。私がこの戦いを知ったのは、小椋一葉の「伝承が語る古代史」[4] だった。

当時の鹿野山一帯の山岳地帯は、大和民族の進出によって次第に海岸地方から追い詰められた毛人がかなりいたようで、戦いが絶えなかった。君津市岩坂のヤマトタケルが創始したと伝わる八雲神社の記録に、「日本武尊が東夷征伐のため相模から上総に渡海し、鹿野山の東夷の首長、阿久留（あくる）を討つに際し、岩坂山に神籬岩境を設け素戔嗚尊の神霊を祭祀したのが創始と伝える。」とある。ここには対抗した相手のことが明記してある。

写真－3　マザー牧場から見た鹿野山

現在、鹿野山にある大きなお寺は神野寺である。神野寺を訪れ、境内を歩いていたとき、住職と話をする機会があった。少し離れたところに阿久留の塚があるという。行ってみると、塚は写真－4のように立派なものだった。木の板には「阿久留王塚（胴塚）ここは鹿野山神野寺の境内（寺領）で、『せんたな』という地を少し下った場所であります。この場所には阿久留王の胴体が埋葬されております。毎月13日の9時30分より法要が奉修されています。」とある。阿久留王は現代に生きているわけだ。

写真－4　阿久留王塚

阿久留王たちは、狩りの道具として石を加工した石器を使ってきた。しかし攻めてきたヤマトタケルらが使っていたのは鉄器だった。この武具の差、文化の差によって阿久留王たちはやられたのである。

阿久留王に関しては他にもいろいろなことが伝えられている。[7]

伊吹山での出来事

ヤマトタケルは東征を終え、信濃から尾張に帰ってくる。そして美夜受比売（みやずひめ）と結婚する。それからタケルは腰につけていた草薙の剣を美夜受比売のところにおいて、伊吹の山の神を退治するために出かけた。以下は古事記の文章である。

ここに詔りたまひしく、「この山の神は、徒手に直に取りてむ」（素手で真正面から殺そう）とのりたまいて、その山に騰（のぼ）りましし時、白猪山の邊に逢へり。その大きさ牛の如くなりき。ここに言挙して詔りたまひしく、「この白猪に化れるは、その神の使いぞ。今殺さずとも、還らむ時に殺さむ。」とのりたまいて騰りましき。ここに大氷雨を零（ふ）らして、倭建命（ヤマトタケル）を打ち惑はしき。この白猪に化れるはその神の使者にあらずで、その神の正身に当たりしを言挙によりて惑はさえつるなり。故還り下りまして、玉倉部の清泉に至りて息ひましし時、御心稍に寤（さ）めましき。故、その清泉を號けて、居寤の清泉（いさめのしみず）と謂う。

古事記の伊吹山に関する記述はこれだけである。

このあと伊吹山の傷が致命傷になり、能褒野でヤマトタケルはなくなるのである。

さて、伊吹山では何があったのだろう。まずは伊吹山そのものについて記しておこう。図－2の地図に示すように、伊吹山は琵琶湖の東に聳える標高1377mの高山で、地質は古生層の石灰岩である。北西の敦賀付近から伊吹山にかけては大きな山がないため、日本海からの風はまともに伊吹山にあたる。特に冬は強く冷たい季節風が吹く。これを伊吹嵐と呼んでいる。その影響は伊吹山の南東にある関ケ原にまで及び、関ケ原だけ雪が積もり、他に雪はないというのは、付近を新幹線で通るときよく経験することで、新幹線の遅れの原因にもなっている。

図－2　伊吹山とその周辺

写真－5　南側から見た伊吹山　新幹線から

伊吹山のこの特殊な気象条件は、植物の分布に影響し、伊吹山特産の植物（ルリトラノオなど）、北方からの分布の西南限種（グンナイフウロなど）、日本海要素の植物（イブキトリカブトなど）など、多彩な植物がみられ、伊吹山は花の百名山でもある。

この伊吹嵐は製鉄にも役立った。鉄を作るには鉄鉱石を高温で溶かし、鉄を分離して取り出す必要がある。高温を得るため、鉄鉱石と燃料を炉に入れて鞴（ふいご）を踏んで空気（風）を送り込む。このやり方を踏鞴（たたら）製鉄というが、この鞴の役を伊吹嵐がやってくれたのである。図－2の日守（ひもり）遺跡からは、鉄器片や鉄滓（製鉄や鍛冶の時に出る鉄のかす）が多く出土し、この地域が製鉄が盛んであったことを物語っている。この踏鞴製鉄を行い、伊吹山東南麓を支配した士族が伊福（いぶき）氏であった。[8] 日守遺跡の北にある伊富岐神社には、伊福氏の祖神を祀る、とある。その勢力の大きかったことがわかる。

一方、伊吹山の西の琵琶湖に近いところでも製鉄・鍛冶は盛んであった。能登瀬、朝日、高番、杉沢、鍛冶屋などの製鉄遺跡があり、小谷山の北には現在も長浜市鍛冶屋町の地名が残っている。この辺一帯を支配していた士族は息長（おきなが）氏である。[9]

製鉄・鍛冶に関係する二大勢力があれば、両者の間に軋轢が生じるのは想像に難くない。ヤマトタケルはこの両者の戦いに巻き込まれたと考える人がいても当然だろう。ではどちらの勢力と敵対したのだろうか。伊福氏だという説、息長氏という説、つまり二つの説がある。

そこで古事記を読み進むと、伊福氏という名は出てこないが、息長氏のほうは、「一妻の子、息長田別王（おきながたわけのみこ）」という文がある。そして息長田別王の子、その子など、息長に関係するヤマトタケルの子孫のことまで書いてある。

伊吹山の西側の伝承を調べると、その一つにヤマトタケルが布陣したという標高143mの雲雀山がある。「ヤマトタケルは、伊吹山を見て、このような霊地に拠る敵なら手ごわい大物だろう、と雲雀山にしばらく滞在して戦備を整えてから、伊吹山に向かった」という。低い雲雀山付近から伊吹山を見ると、高く大きい。戦備を整えたい気持ちもよくわかる。雲雀山のある位置は息長氏の勢力圏である。

もう一つは、彦根市磯にある磯崎神社である。神社前にある説明板には「日本武尊が東征の帰途、伊吹山の荒ぶる神を打ちにでかけるが、逆に白猪の毒気にあてられる。ようやく居醒の清水で正気を取り戻し尾張に向かうが、伊勢の地で亡くなり白鳥となって大和へ飛び立ったことが記紀に記されている。ところで磯崎神社の縁起によると、日本武尊が亡く

写真－6　雲雀山（正面の小山）　小谷山登山道から

なったのは、磯の地であり、そこに御陵を築いたとある。その後聖武天皇の勅令により社殿が建立され、これを磯崎大明神と号したのが磯崎神社の起こりと伝えている。」とある。このあたりは小さな山（磯山という）になっており、御陵らしい感じがする。磯山には古墳があり、この被葬者は息長田別王だともいわれている。

写真－7　磯崎神社入口の鳥居　左に磯山がある

こう見てくると、伊吹山のヤマトタケルの敵は、息長氏ではなく伊福氏だという考え方のほうに分があるように思える。

ただ、長浜市史にある「ヤマトタケルの子孫の何代にもわたって近江との関係は深いのは、服属しがたかった近江を何代かにわたって懐柔しようとした伝承が表されているのかもしれない。」という記述は、息長氏の微妙な立場を示唆していて興味深い。[10] しかし、この話は後に福井から天皇になる継体天皇ともつながっているので、継体天皇にも英雄ヤマトタケルの血が流れているということを言いたかったようにも思える。

ヤマトタケルの敗因

ヤマトタケルの遭難の原因を、天候変化の激しい伊吹山の特性や、当時から使われていた毒性の強いトリカブトを塗った矢にやられた、という考え方もできる。

だが、戦いの性質から考えると、焼津や鹿野山での戦いは、狩りや魚を取って食料とし、石を道具として使う、自然のものをそのまま最大限利用して生活していた縄文文化の人々との戦いであった。そこで鉄器、剣や兜を使うヤマトタケルは勝つことができた。

伊吹山の戦いは、製鉄をし、鍛冶をするという当時の先進技術を扱う人達の間の争いで、その中に入っての戦いである。従って、今までとは違う異質な環境での戦いではなかったのか。そして、ヤマトタケルはまさに、新しい「生産と技術」に対応できずに敗れたのではないか、というのが私の直感的見方である。

文　献

1）「古事記」：岩波文庫、1963
2）「日本書紀（二）」：岩波文庫、1994
3）上田正昭「日本武尊」：吉川弘文館、1960
4）小椋一葉「伝承が語る古代史Ⅱ天翔る白鳥ヤマトタケル」：河出書房新社、1989
5）埼元正教「ヤマトタケルに秘められた古代史」：けやき出版、2005
6）若村淳之監修「ふるさと三国志」：SBC静岡放送編、1982
7）露崎清美「阿久留王」：文芸社、2003
8）竹田繁良「伝承地でたどるヤマトタケルの足跡」：樹林社、2012
9）宝賀寿男「古代氏族の研究⑥息長氏」：青垣出版、2014
10）長浜市史編纂委員会「長浜市史１湖北の古代」：長浜市役所